令和5年度

作文コンクール

入賞作品集

未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール

建設産業で働く方の作品

高校生の作文コンクール

高校生の作品

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和５年度　建設産業人材確保・育成推進協議会

作文コンクール入賞作品集

選 定 結 果

建設産業で働く方の作品 …… P3

(未来を創造する建設産業「私たちの主張」作文コンクール)

国土交通大臣賞

熊谷宗浩　(株)小野良組　宮城県　「ICTを転がせ」…… P4
千葉君杜　(株)橋本店　宮城県　「私が見た建設業の力・技術」…… P5

不動産・建設経済局長賞

津場一誠　(株)橋本店　宮城県　「言葉のちから」…… P6
菊地百香　会津土建(株)　福島県　「過去から今に、今から未来へ」…… P7
池谷実莉　(株)中村建設　山梨県　「後輩の目・先輩の背」…… P8
鮎貝悟　北陽建設(株)　長野県　「子ども達から学ぶ建設業の姿」…… P9

優 秀 賞

髙野綺羅々　(株)廣瀬　新潟県　「２つの技術を未来へ」…… P10
室橋李璃　(株)笠原建設　新潟県　「夢をつくる」…… P11
芹澤和也　加和太建設(株)　静岡県　「白く、馳せて燃ゆる」…… P12

高校生の作品 …… P13

(高校生の作文コンクール)

国土交通大臣賞

髙橋龍之介　山形県立山形工業高等学校 土木・化学科 土木技術コース ２年
「見えないHERO」…… P14

不動産・建設経済局長賞

佐久間優人　福島県立福島工業高等学校 建築科 ３年　「アンテナを広げて」…… P15
下方陽平　愛知県立愛知総合工科高等学校 建設科 ３年　「私達の日常を支える建設業」…… P16
辻田陽彩　長崎県立長崎工業高等学校 建築科 ３年　「我が家は古民家」…… P17
松本瑞希　長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 ３年　「「建築の使命と協力してものをつくる達成感」」…… P18

優 秀 賞

野澤成仁　栃木県立小山北桜高等学校 建築システム科 ３年　「ものづくりのあたたかさ」…… P19
池田稜　千葉県立京葉工業高等学校 建設科（土木コース）３年　「「当たり前を支える～影から社会をバックアップ～」」…… P20
渡辺一匠　山梨県立甲府工業高等学校 建築科 ３年　「建築とは」…… P21
名田纏　富山県立高岡工芸高等学校 建築科 ２年　「受け継がれるもの」…… P22
野崎圭吾　金沢市立工業高等学校 土木科 ３年　「土木の魅力」…… P23
石田麗奈　滋賀県立彦根工業高等学校 建設科 １年　「笑顔の絶えない街作り」…… P24
中島莉菜　滋賀県立彦根工業高等学校 建設科 １年　「理想を追って」…… P25
小川友菜　長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 ３年　「「私の憧れ」」…… P26
松田麻央　長崎県立大村工業高等学校 建設工業科 ３年　「暮らしをよりよくするために」…… P27
山口留奈　長崎県立長崎工業高等学校 建築科 ３年　「命を守る仕事」…… P28
鈴木聡真　熊本県立玉名工業高等学校 土木科 ３年　「ものづくりとは」…… P29

受賞作品の講評

運営委員長　古阪秀三

この作文コンクールは建設産業で働く皆さんからの「私たちの主張」と高校生の皆さんからの「高校生の作文コンクール」の2つの部門で成り立っています。

「私たちの主張」は、建設産業で働く方々の思いであり、今年で16回目となります。今年のテーマは「未来に繋げる建設産業のちから・技」で、全国から434作品の応募がありました。最少年齢は18歳、最高年齢は68歳でした。また、女性の応募が今年は14.1%でした。さらに、30歳未満の若者の応募が約73%、一方では、仕事の第一線を退かれる頃になる熟練の先輩の方々が若者に伝えておきたいという意欲を持って、「私たちの主張」をしてくださいました。応募して下さった434人の方々に心から敬意と謝意を表します。

今年は国土交通大臣賞に輝いた方が2人いらっしゃいます。

まずは熊谷宗浩さん。熊谷さんは『ICTを転がせ』と題して、2011年3月11日の東日本大震災の復旧と復興の違い、その復旧での建設産業界／自らの活動の状況を確認しながら、今後の建設産業界の高齢化において、「残業をしないことが当たり前の環境」を前提に、合理的に現場を進めることの方向性を示している。具体的には、週休二日制の導入、ICTの活用、女性活躍の推進、など。そして、「未来を生きる人たちのためにバトンを渡す準備を進めていきたい」。これらの思いを持たれた人たちの集まり、活躍できる土俵を創ることが望ましいと思われる。

2人目の大臣賞は千葉君杜さん。千葉さんは『私が見た建設業の力・技術』と題して、小学4年生の時に起きた東日本大震災を、父が「これからどうなっていくかよく見とけ」と私にいった言葉、その後の様々な震災復興の流れを見る中で、自分自身が復興への第一歩を踏み出していた建設会社に入社したことの流れを丁寧に書いている。その結論として、東日本大震災の記憶を忘れてはいけないのであれば、どのようにして町が復興へと向かったのかも忘れてはいけない。そのためにも、自分自身は建設業の力の一部として建設業と共に進化していきたい。建設技術者として見事な覚悟である。

不動産・建設経済局長賞には次の4人が選ばれました。

津場一誠さんは、『言葉のちから』。津場さんの作文にある『言葉』に「類似の意味をもつことば」を並べると「定例打合せ」、「顔合わせ」、「挨拶」、「一致団結」などがある。これらは、津場さんが初めて建設現場の所長をした現場での発注者、監理者、施工者との相談等の時に発した言葉に使ったもので、その結果として素晴らしい建築物（高等学校の体育館新築工事）が完成している。面白い視点からの作文である。

菊地百香さんは、『過去から今に、今から未来へ』。過去から現在まで活躍した技術者と技能労働者、現在から今後活躍する技術者と技能労働者、教え教わりながらの現場づくりの神髄をわかり易く書いたものである。長年、建設業界で活躍した職人さんたちの頭と技能／技術、最近はDX等デジタル化が進み、それらをいかに合理化するかが、まさに日本の建設業の重要な今後の世界である。

池谷実莉さんは、『後輩の目・先輩の背』。池谷さんの作文の狙いは建設業での女性の活躍の場の男女平等化といえる。その前提として、建設業に就職する女性の現状を、自らの経験、また、同じ企業に就職した後輩の経験から、女性の後輩の目／女性の先輩の背として、素直な内容で発表している。ただし、若手の離職率が高いのは、建設業に限ったことではなく、日本全体の問題となっている。自信をもって、若者の活躍の先鞭を切ってほしい。

鮎貝悟さんは、『子ども達から学ぶ建設業の姿』。様々な場所、地域での土砂の流出と子供たちに忍び寄る危険、この危険をいかに防ぐかの自らの活動を率直に書いている。その中で、地すべりモデル、落石ゲームなどを作り、小学校等の先生・児童の下で講義した。その結果は「こんなに楽しい授業ありがとう」、「これから何が自分にできるか考えたい」等の言葉。結局は「小学生から建設業の存在価値とあるべき姿を逆に学ばせて頂いた」。静かであるが、力強い作文である。

一方、「高校生の作文コンクール」は、全国の高校の建築学科、土木学科等で勉強をする若者が建設産業に抱くイメージや夢を発表するもので、今年が11回目です。今年のテーマは「ものづくりの魅力」で、全国から920作品の応募がありました。また、こちらでは今年も女子の応募の割合が2割を超え、約22%となりました。応募してくださった920人の若者の勇気をたたえ、また敬意と謝意を表します。

今年、国土交通大臣賞に輝いた方は髙橋龍之介さんです。

髙橋龍之介さんの作文は『見えないHERO』。髙橋さんが工業高校土木・化学科に入学したきっかけは50年に一度、百年に一度の豪雨と様々な被害を経験したことから。その経験の中で、毎日全力で復旧作業にあたる土木関係者、我が家の復旧には建設業者やボランティアの方々の姿が希望に見え、特に土木の必要性と大切さを学ぶ機会をたくさん経験したという。そして、普段誰にも気づかれなくとも、安全な日常を過ごすために全力を注いでいるのが土木のものづくりだ、そしてそれこそ「真のHEROである」とのこと。髙橋さんの今後の活躍に期待したい。

不動産・建設経済局長賞には次の4人が選ばれました。

佐久間優人さんは、『アンテナを広げて』。「私が思うものづくりの魅力は2つある。1つ目は感動を生み出すこと、2つ目は世界に対するアンテナが広がることだ」という。そんなことを考える中で、1400年も前につくられた法隆寺の特集をテレビで見て心を動かされ、「後世に残る建物をつくってみたい」と思ったとのこと。それが1つ目のものづくりの魅力。最近では、街並みや変わった建物等の写真を撮り、本を読み、それらのアイデアを自身の設計に取り込む。これが2つ目の魅力。これら広い視野での活動に拍手。

下方陽平さんは、『私達の日常を支える建設業』。はじめに「建設業、それは身近にあり、多くの人々の生活を支えている重要なもの」という。具体的には、「通勤通学などにも使う道路や橋、鉄道、上下水道、港湾などは欠かせない生活インフラ。こうした生活インフラを整備するために行われる建設工事はとても重要なもの」とある。その実感を、港湾工事の見学の体験と、その場での現場監督とのやり取りを通じて鮮やかに描かれている。

辻田陽彩さんは、『我が家は古民家』。第一声の「我が家は曽祖母の家だ」で始まる純和風の昭和の木造住宅。柱には子・孫・曾孫らの背比べ跡。家と人が育ってきた築65年間の歴史を物語る。辻田さんが建築分野を志した背景にこの存在は大きいという。そして、誰かの救いになるものを考えて作り、形にし、生活の質を上げる手助けに結び付くことが「ものづくり」の最大の魅力だとのこと。建設産業の魅力発信に期待したい。

松本瑞希さんは、『建築の使命と協力してものをつくる達成感』と題して、私はずっと人の役に立つ仕事に就きたいと考えていた。小学生の頃は責任をもって誰かを幸せにしたいという使命感。今は家を建てる行為は常に責任が伴い、それは建築主の未来を預かっていることになるから。それらの魅力は「達成感」。そのためには良い材料と綿密な計算が必要。「ものづくりの魅力」は『他人と協力してみんなで作品を完成させたときの一体感だ』見事な意見であり、結論である。

「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」の応募作品を読みながら、いつも感じることですが、2つの部門とも、実際に経験したこと、観察したこと、家族・同僚・友達と話したこと、さらに将来への期待などが丁寧にかつわかり易く書かれています。それが契機となって建設産業で働くことになったという事例が多いことも納得です。すべてを公開して読んでいただくのがいいのではないかとの印象を持っています。

その一方で、日本の建設産業の近未来の市場は相当な変革が求められます。伝統的なこと、技術的な継続性を大事にすることはいうまでもないことですが、その一方で、思い切った改善、革新等の活動も重要です。このような状況の下、素直に自分が感じたこと・考えたことが書けること、悩ましいこと・問題だと思うことを文字で伝えられること、これらのことがいかに大切かを「私たちの主張」と「高校生の作文コンクール」を読みながら確信しました。これからも大いに文章を書きましょう。そして他者に伝えましょう。それらが建設産業の改善、働きがいのある産業へとつながることを期待したいと思います。

写真撮影：衣笠 名津美

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和５年度
未来を創造する建設産業
「私たちの主張」作文コンクール

■趣　　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、建設産業で働く方々の熱い想いを伝えていただくとともに、一般の方々に建設産業についての理解を深め、関心を高めていただくために作文コンクール「私たちの主張」を実施しています。

今コンクールは、平成20年度から実施し、今年度で16回目となりました。

■募集概要

応募資格	建設産業の仕事に従事している方
応募期間	令和5年5月8日(月)～ 6月30日(金)
応募テーマ	建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。 未来に繋げる建設産業のちから・技
応募総数	434作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

■選考委員

古阪秀三	立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授 建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
宮沢正知	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
松野憲治	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
上田国士	(一社)全国建設業協会 業務執行理事
樋脇　毅	(公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
奥地正敏	(一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

2023 ESSAY CONTEST

国土交通大臣賞

ICTを転がせ

熊谷（くまがい） 宗浩（むねひろ）［株式会社小野良組］

身動きがとれないまま一夜をその場で過ごし、震えながら迎えた朝、小雪が舞う中自宅までの20kmの道のりを歩き始めたのは、もう12年も前のことになります。歩き始めてしばらくすると、私と同じ建設業関係者らしき3人の男性が、道を塞ぐ瓦礫をバックホウで取り除いている姿が目に入りました。

入り組んだ海岸線沿いの町は、1本の道路が寸断されるだけでライフラインが絶たれます。海は流出した重油で焼かれ、誰もがこの町に一体何が起きたのか理解しきれておらず、行政からの要請も行き届いていない段階で、命の道を通すため懸命に作業する姿は、今も目に焼き付いて離れません。ともすれば自衛隊や消防・警察の活躍ばかりがクローズアップされがちですが、ニュースにならない裏側で懸命に作業をしている人たちがいました。その後、私自身も、停止した火葬場の代わりに急遽整備されたご遺体の仮安置場所で、その後再開した火葬場へご遺体を運ぶため掘り起こす作業に従事しました。彼らや私だけでなく、あの頃、繰り返す余震に怯えながら混沌とした目まぐるしく変わる状況の中で、いち早く重機を動かし、瓦礫を撤去し、道を拓いたのは私たち建設業者です。この町を再興に導いたのは、間違いなく建設業界で働く私たちなのです。私は苦しかったあの経験を経て、自然災害が多発するこの日本で、誰かが再び起き上がるために建設業界は必要な支柱であらねばならないと、強く心に誓いました。そして、誰かのために尽力できることを誇りに思いました。

一方、建設業界は、未だに「きつい・汚い・危険」という悪しき呪縛に囚われています。

仕事に対する「魅力」のうち、災害等から社会を興す「力」、馬力・底力はあっても、人を惹きつける「魅」の部分が欠けているからだと私は考えています。

では、「魅」を満たすにはどうすればいいのか。

確かに、雨天時や真夏の炎天下での作業は男性でも厳しく、工期が迫り残業が続けば身なりは薄汚れ、下請会社のオヤカタにも怒鳴られ・・・、そのような経験は私にもあります。これでは若い人たちが集まらないのも頷けます。このまま高齢化が進み離職する人が増えれば、深刻な人手不足に陥ります。

しかし、建設業界は今、変わりつつあります。

震災後私が担当した現場では、施工担当者・事務担当者で相談し合い、カレンダー通りに施工ができるよう、また、長期休暇の前後にはプラス1日～2日休めるよう予め作業日を設定し、積極的に休暇を取れるような仕組みをつくり実践してきました。更に、残業0時間を目標に、作業や役割を分担することで、全員が「残業をしないことが当たり前の環境」に慣れ、合理的に現場を進めることが出来ました。

週休二日制の導入、人手不足・高齢化・危険作業をICTで払拭する試みも始まり、女性が活躍できるような推進モデル工事の活用も推奨されています。国は新3K「給与・休暇・希望」を掲げ、バックアップ体制も整いました。もちろん、建設業界で働く私たち自身も、襟を正していかなければなりません。悪しき風評を放置しておいたのは、私たち世代でもあるのですから。

半ば熱量に動かされて駆け回った日々は過去となり、今、建設業界は大きな転換期を迎えようとしています。そろそろ、未だにまとわりついている建設業界に対する「きつい・汚い・危険」という昭和のイメージを覆す時なのです。

週休二日制の導入でメリハリのついた仕事をすることができれば、休日はゆっくり過ごすことができ心身ともにサッパリする（「きつい」「汚い」がなくなり）、ICTによって合理化された職場環境の中では視えない危険が明らかとなり（「危険」を回避する）、より安全な作業ができる。これからはそういう時代です。そして、過去の実績や経験値にばかり囚われるのではなく、時には若い人の柔軟さから学んでいかなければなりません。若い世代と古い世代が相互に矢印（⇔）を向け合えば、ICTも上手く転がり始めると思うのです。

スーツを着てネクタイを締めて現場に出るわけにはいきませんが、iPadを片手に颯爽と現場を歩き回る姿を子供や若い人たちに見てもらいたい。無事竣工を迎えた時のあの達成感や感動を建設業界で働く全ての人たちに一緒に味わってもらいたい。効率化した作業により増えた休暇で、誰もが充実した時間を過ごしてもらいたい。

そして、私はこれから、建設業には自然災害から社会を興す機動力があること、そこで働くということは構造物（「モノ」）を造り上げる達成感を感じられること、さらに最新の技術を使える面白さがあることや余暇を楽しめる充足感があること、他産業に劣らない「魅」の部分が沢山あることを伝え、未来を生きる人たちのためにバトンを渡す準備を進めていきたいと思っています。

2023 ESSAY CONTEST

国土交通大臣賞

私が見た建設業の力・技術

千葉 君杜（ちば きみと）［株式会社橋本店］

「これからどうなっていくかよく見とけ」これは私が小学4年生の時に起きた東日本大震災で被災し、変わり果てた町を見て建設業界で働いている父が私に言った言葉です。私の生まれ育った町は宮城県本吉郡南三陸町。町の8割が津波にのまれ東日本大震災で被災した地域の中でも特に被害が大きいとされた地域でした。変わり果てた町の姿、絶望する人々、町から去ってゆく人々、人間の脆さ、人同士の争い。当時小学4年生の私にはあまりにも衝撃的な光景と、言葉で言い表す事の出来ないような感情が深く刻まれたのを覚えています。そんな状況の中、余震と再度津波がくる事を考慮し避難場所を移すため内陸へと家族で瓦礫の中を歩いている時でした。私が最初に目にしたのは瓦礫撤去作業を行う建設業界の人々でした。建設用機械で瓦礫を移動し道路を切り開き、私たちの歩く道を作っていました。当時の私にはその道を使って自衛隊の方々が入って来られるようになった事など知る由もなく、ご飯やお風呂、服や布団など衣食住の支援をしてくださった自衛隊の方々がすごい。と思うばかりで、そこに確かにあった建設業の力に気づく事ができませんでした。そこから時が流れ私に変化があったのは仮設住宅が町の高台に次々と建設され、避難所生活から自分たちの家へと移り変わる時でした。当時の私が初めて建設業の力をすごいと感じ、認識した瞬間でした。ものすごい数の住居と環境を作り上げ、人々にこんなに感謝される仕事が建設業なのか。と思ったと同時に建設業に憧れを抱くようになり、さらに町の変化に人一倍、目を向けるようになりました。それから歳を重ねるごとに徐々に父が私に言った言葉の意味がわかり始めました。町の瓦礫がどうやって無くなったのか、防波堤がどうやってつくられるのか、道路は誰が作っているのか、町全体の嵩上げは誰がやっているのか、山を開き新しい土地を作り建物をつくっているのは誰なのか、全て建設業の力だと自分の目で見て初めて理解する事ができ「町は建設業の力で復興する」と私は確信しました。その時に私のやりたい仕事は決まりました。それは人々が絶望するような状況を変える力がある建設業でした。

それから12年の歳月が流れ、現在私は小学4年生の時に目にした自分の町の瓦礫を移動させ、復興への第1歩目の作業を行なっていた建設会社に入社し、まもなく3ヶ月が経とうとしています。現場配属後なにもわからず、職人さん達とも話ができず、先輩に少しずつ教えていただいた仕事をこなす日々で、私の中でのイメージと現実のズレを感じていました。とりあえず「見る事と自ら聞く事」をしてみようと思い、先輩と職人さんが何をしているのか見て、疑問があれば声をかけ「教えてください」と行動するようになりました。すると任せてもらえる仕事が増えたり、職人さんが「現場は慣れたか?」「今日の朝礼良かったぞ」と声をかけてくれたりするようになりました。私の今の仕事は工種ごとに職人さんが行う作業の写真を撮影し、書類としてまとめる事です。その中で見る職人さんの技術力や精度の高さに驚く毎日です。しかし私が質問をしたり、話を聞いたりしていると「若い人がいない」「担い手がいない」とよく耳にする事があります。私はこれこそ現在建設業界が直面している人材不足問題そのものなのかと感じさせられました。やはり世間のイメージでは今でも建設業は「3K」のままであり、これから働く人達が憧れる職業としては難しいのが現状だと思います。それでも私は建設業の力に助けられ、憧れ、実際に建設業界で働けている事に誇りを持っています。そこにはより身近で感じた建設業の力、技術力の高さが私をそうさせたと感じています。そんな私には「3K」や「人材不足」などで今の職人達の持っている高度な技術、建設業の持っている力を衰退させていいとは感じていません。東日本大震災の記憶を忘れてはならないのであれば、あの時に「どのようにして町が復興へと向かったのか」も忘れてはいけないはずです。だからこそ私は今を生きる人々に建設業の持つ力と技術を知ってほしい。「あなたの住んでいる家」「あなたが通っている学校」「あなたが見上げているビル」全て人の手で造られたのです。そこには建設業という大きな力の中に幾万とある職人の技術が詰まっています。そこに興味を持ってほしい。触れてほしい。そのために私は自分が肌で感じた「建設業の力・技術力の高さ」を多くの人へと伝えて行きたいと思います。これから先、建設業に携わる人が増えれば建設業はもっと進化する。私はそう信じてこれからも建設業の力の一部として、建設業と共に進化を続けていきたいと思います。

不動産・建設経済局長賞

言葉のちから

津場（つば） 一誠（いっせい）［株式会社橋本店］

新築の香りが漂うフローリングの上には、パイプ椅子がきれいに整列されプロセニアムアーチの奥には濃淡な青い暗幕が揺れている。アリーナの周りには紅白幕がかけられており、門出を迎える卒業生達のための準備が進められている。

地元に誇れる建物をつくる仕事に携わりたいと中学生の頃に決めた想いは変わらず、建設業の道に進み早5年と半年。初めて所長を任せて頂いた現場は高等学校の体育館新築工事だった。大きなプレッシャーと不安はあったが、現場乗り込み前の現場調査では何もないまっさらなグラウンドに新設する体育館をイメージして胸が高鳴る。

工事関係者が集まる最初の定例打合せでは、これから約1年と数か月お世話になる先生方との顔合わせを行い、最後に校長先生からお言葉を預かった。「新しい三年生を新しい体育館で見送ってあげたい。新型コロナウィルスの流行により、修学旅行などの学校行事をさせてあげられなかった生徒たちに、せめて最後に新しい体育館での卒業式をプレゼントしてあげたいんです。」 乗り込み前からかなり厳しい工期ということは分かっていたが、先生方のその言葉が、私を含め工事関係者を奮い立たせた。

工事は順調に杭工事、基礎工事、鉄骨工事と進んでいったが、仕上げ工事に入り、近年の人手不足や新型コロナウィルスによるサプライチェーンの滞り、資材の高騰が我々現場関係者を悩ませた。

利用者が使いやすく、安全な建物を提供するのが我々つくり手の仕事。限られた工期と金額の中、より良いものをつくりたいという理想があるが、すべて理想通りに実現させるのが難しい現実との相違が、頭の中をぐるぐると回る。しかし、「おはようございます。工事ありがとうございます。完成楽しみにしています。」 と、通勤中、学校の正門から現場ゲートへ向かう途中にすれ違う学生たちが気持ち良く挨拶をしてくれる姿をみて、この子たちのためにも少しでもいい建物を提供したいと、悩んでいた気持ちがなくなるほどの励みとなった。

目まぐるしく進む工事の中、月に一度の定例打合せの際には先生方を交えて手摺の形状やユニット製品、色決めを行っていった。次第に先生方を含めた工事関係者全員で完成イメージが固まっていくとともに、発注者、監理者、施工者という枠が外れ、一致団結して建物を建てていっているような気持ちになる。

そして工事はいよいよ終盤。体育館のメイン工事ともいえるフローリング貼りが終わり、とうとう新しい体育館が完成した。既存の体育館より明るめのフローリングにピカピカのコートラインが光り輝く。正面をみると、皆で決めた濃淡な青い暗幕に校章の刺繍が映えている。

引渡し前の検査を終え、検査官から「検査は合格です。ありがとうございました。」 という言葉を頂いた際に一気に肩の荷がおり力が抜けた。上司、後輩、私の三人で缶コーヒーを片手に完成した建物を眺め、何とも言えない気持ちが込みあがってくる。先生方へ初のお披露目となる内覧会では、多くの先生方から「きれいな建物をつくって頂きありがとうございます。」「使うのが楽しみです。」 と本当にありがたいお言葉を頂いた。

そして、3月1日に向けての準備が始まり、パイプ椅子がきれいに整列され、紅白幕が生徒たちを出迎える。同時施工を行った校舎と新体育館をつなぐ新設の渡り廊下を卒業生が誇らしげに歩いているシーンを想像するだけで感極まる。同時に、無事新しい体育館で卒業式を迎えさせてあげることができたことを心の底から誇りに思う。

建設業を仕事としている以上、工期やコスト面等、さまざまな問題がある。その問題ひとつひとつに真摯に立ち向かい、発注者、監理者、施工者が一致団結して解決していくことこそが、チームワークという「技」と変わり、引き渡した際に頂く「ありがとう」の言葉が、私達つくり手にとって未来に繋がる「ちから」と変わる。

近年、担い手不足改善としてICTやDXといった働き方改革が日々、瞬く間に進化しているこの建設産業において、人と人との良好な関係性が、よりよい物をつくりあげるという原点だけは永遠に変わらないものであってほしい。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

過去から今に、今から未来へ

菊地（きくち） 百香（ももか）［会津土建株式会社］

私は、今年で入社4年目。高校の授業で"ものづくり"に興味を持ち、インターンシップで今の会社に来たことがきっかけで施工管理の職業に憧れ、入社を決めた。

今回は、初めて配属された現場であったことについて話そうと思う。その現場は、水の浸食によって大きく護岸が崩れてしまった箇所を修復するという内容だった。1期工事と2期工事があり、1期工事は問題なくスムーズに作業が進んだが、2期工事はそうはいかなかった。工期が2月から7月と山からの雪解け水と雨で川が増水する時期だったため、仮締切を造成しても何度も崩されてしまったり、1期工事の時に釜場に設置したポンプだけでは十分に水を排出することができず、ポンプの数を倍近くまで増やしたりした。初めて目の当たりにした、水が起こす力の強さと大量の水に圧倒されていた私は、職人さんに「この水の量で作業なんて無理なのかもしれないですね。」と弱気な言葉をかけた。すると、笑いながらその職人さんに「水は確かに多いけど、こっちには頭と技術がある。このくらいの水で弱気になっているようじゃまだまだ。水を制する者は、土方を制する。よく覚えておきな。」と言われた。その少し強気な言葉で私の弱気な気持ちは一瞬にしてなくなった。後日、上長と職人さんたちによる作戦会議が行われた。施工位置が、川がカーブしている場所だったため水が集まりやすいのだろうとのことで、川の上流で瀬替えを行い、施工箇所に流れてくる水の量を減らそうという結果になった。作戦は、大成功だった。施工箇所に流れてくる水の量がぐっと減り、作業効率が以前より格段に上がった。長年、建設業界で生きてきた人からしてみれば、当たり前の答えと結果なのかもしれないが、私は、短時間で答えを出せる知識と、その答えに100%応える技術に感動した。これまで沢山の現場を経験してきて、様々な知識と技術を蓄えてきた上長と職人さんたち、いわば先輩たちは本当にかっこよくて、いつか自分もこうなりたいと強く思った瞬間だった。先輩たちも上の人たちの姿を見て心を躍らせ、憧れを抱いて今があるのかと思うと、過去からの強い繋がりを感じる。

今の建設業界は年々就業者数が減少している。若者の就業者数よりも、年齢による引退者数の方が多いからだろう。このことから、若者を増やすためにはどうしたらいいのかを考える人が多くいると思う。就業者数を増やすことは大事なことかもしれないが、それと同じくらい建設業界の第一線で活躍してきた先輩たちを大事にしなくてはならないと思った。私の職場は、歳が近い人よりも歳がかなり離れている人の方が圧倒的に多い。しかし、先輩だらけの中で仕事をしてきたことで入社してから沢山のことを吸収し、教わることができた。これは、間違いなく私の財産と力になるもので、そう思わせてくれたのは、先輩たちが自分の持っている知識を惜しみなく私に伝えてくれたからだ。こうして、建設業は繋がってきたのだと思う。また、最近は、DXの普及によって便利な技術が数多く開発されているが、デジタル操作が難しく、先輩たちの力だけではその技術を十分に発揮することが難しいときがある。その場合は、デジタルに慣れている若手が先輩に操作方法を教えていく。いつも教えてもらってばかりだが、こちらが教えることもある。そうやって、教え教わりながら一緒に力を合わせて現場を造り上げていく、やりがいや楽しさは計り知れない。

このように、建設業はどちらかの力だけでは成り立たない部分がある。お互いが助け合って仕事をしていくのだ。昔は、「3K」と謳われていたが、今は安全で綺麗な環境で仕事ができる。なおかつ、希望と可能性に満ちており、技術の進化によってますます素敵なものになっていくだろう。そのような業界にいることを、私は誇りに思う。そして、今度は私が、先輩たちがしてきてくれたことを次の世代へと繋げていかなくてはならない。知識や技術はもちろん、「建設ってすごく楽しいよ！」と伝えていけるように日々精進していきたい。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

後輩の目・先輩の背

池谷（いけや） 実莉（みのり）［株式会社中村建設］

目をキラキラと輝かせ現場に立ち向くその姿勢は、楽しみな一方で肩を上がらせ緊張しているのが沸々と漂う、それが入社間もない後輩の姿であった。入社六年目となったわたしに、初めてできた女性の後輩、会社二人目となるドボジョである。

まだ彼女が高校生のとき、現場見学や会社説明会等で学校や職場をお互いに行き来し、何度か話す機会があった。そこで彼女はわたしにこう聞いた。

「女性なのに大変ではないですか?」

わたしは迷うことなく、「毎日楽しいよ」と一言答えると、彼女は心配そうな顔から笑顔へと変わった。この業界に入ることを決めていたと言うが、彼女にとって同じ職場に女性社員がいることがこの会社へ入る決め手となったと言う。きっと心強かったのではないだろうか。

六年前、わたしが入社した頃の話だ。建設業で働く女性はまだ珍しい存在であった。現場のトイレ問題を始め、夏の暑さ・冬の寒さ対策等、会社に女性技術者がいなかったこともあり、不安と不満の日々であった。また、女性だけでなく、建設業において高齢化が進むこの中で、人手不足が深刻化されている。中でも若手の離職率が高いのが一番の問題点だ。休みが少ないことや、長時間労働といった時間の拘束、また、3K【きつい・汚い・危険】と言った昔からの印象が強く、それが理由で一歩引き下がってしまっていた。

しかし、建設業界は日々進歩し続けている。離職率を減らすために、現場で週休二日制のモデル工事を取り入れ、休日を増やすことや、人手不足・長時間労働の解消のため、ICT施工の技術や、重機の遠隔操作技術の活用によって、建設現場の生産性及び安全性を向上させるなどの新しい技術を用いて業務の効率化を図っている。また、国土交通省が定める「快適トイレ」が推奨されたことや、夏は空調服、冬はヒートベストといった季節に合わせたアイテムも毎年格段に増えているのが現状だ。3Kが新3K【給与・休暇・希望】へと変わった今は、女性でも充分に働ける環境であるが、男性も以前の建設業から比べれば、働きやすくなったのではないだろうか。

年々増加している女性技術者であるが、割合はまだ三分の一にも満たさないと言う。

「仕事は、石の上にも三年」

今、わたしが後輩に贈りたい言葉だ。どんなに好きな仕事、やりたい仕事であっても、人間誰しも最初から上手くいくとは限らない。しかし、そこで壁にぶつかっても逃げず、自分自身に強くなってほしい。この仕事は経験工学だ。一度した失敗は次に繋げ、前よりも上手くできたということは成長の証。覚えることが多くて大変な一年目ではあるが、覚えたことが増えて嬉しいと考え方を180度変えてみてはどうだろうか。仕事を覚え、任せてもらえるようになれば、達成感とやりがいで満ち溢れ、日々仕事が楽しくなるはずだ。まずは一年、そして二年、三年とめげずに頑張っていってもらいたい。それがわたしの願いである。

この仕事は、地図や形に残る仕事、また、人々がより安全に暮らすための社会インフラを支える重要な仕事である。私たちが生活していくためには、建設業はなくてはならない存在であることをより多くの方に知ってもらうことが、今の私たちの思いであり、これからの未来が明るくなる大きな一歩に繋がるのではないだろうか。

更なる私の目標は、女性でも一人の技術者として評価してもらえることを目指し、女性でも頼られる存在になること、また、安全かつ快適で喜んでもらえる仕事をすることだ。後輩を持ち、「わたしについて来い」と胸張って言うには自分自身まだまだ努力が必要だ。しかし、知識や技術を受け継ぐ若手の育成を始め、女性が就業しやすく、また長く働き続けられる未来を創るため、男性社会に女性がいることを当たり前にし、より多くの女性に働いてもらうためにも、私たちの世代がロールモデルとなり、この先の建設業を共に担っていきたい。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

子ども達から学ぶ建設業の姿

鮎貝（あゆがい） 悟（さとる）［北陽建設株式会社］

一年前の5月25日の夕方、会社の電話が鳴った。建設事務所からの出動要請だった。当社の維持管理している県道へ土砂が流出し、通行が危険な状態とのこと。直ちに工事部門の数名に現場へ急行してもらった。数時間後帰社した社員から様子を聞くと「そんなに大したことではなく治まった」との報告だった。後に詳細を知ったこの災害は、付近の沢が強雨で荒れ、土砂が下流の狭い用水路に流れ込み、道路横断部で詰まり県道へ溢れ出たものだった。その土砂を含んだ泥水は一段下がった小学校の進入路へも流れ込んだ。幸いにも小学校長が雷雨を心配し、ほとんどの児童を帰宅させた後だったので人災は回避できたが、構内道路や校庭に泥が堆積し、しばらく支障が出ていたことをその後の学校便りで知った。その小学校は、社長や社員そして自分の子供が通っている、市の指定緊急避難場所であり比較的安全な場所での出来事であった。当時少し甘くみていた自分を深く反省した。

この事案の前後、同僚から別件で相談を受けていた。当時、国交省関東技術事務所に併設されている建設技術展示館へ当社の防災工法を出展していたところ、7月に夏休み子供体験教室「建設技術を見て！触れて！学べる！」体験型イベントへ参加する意思があるか、打診されていた。その同僚は、子ども相手であること、千葉で遠いこと、コロナ禍であったことから断ろうとしていた。私はその時、決断して「いや参加した方が良い。レトロなピンボールの様な落石コロコロゲームを作り、更に3Dプリンターで地すべりモデルも作成し、アンカーと鉄筋挿入工の対策効果が見れるものも作って、子どもに楽しんでもらえば」と進言した。出展協力が決まった。同僚や部下は、自分の創造したものを作ってくれた。紙芝居風の災害写真紹介やビデオも用意した。

当日は雨であったが、相当数の親子連れが訪れてくれ盛況であった。少し離れたところにミニ重機の運転ができるコーナーも人気であったが、それ以上に当社の落石ゲームとラジコンも大人気で長蛇の列ができた。待ち時間に紙芝居やタブレットのビデオで防災について親子で学んでもらった。近くに常設展示されていた土石流・地すべり・崖くずれコーナーも紹介した。その日自分の直感が働き、長男の重機のラジコンも持参していった。昔の様に重機が乗れて嬉しいと思う子もいれば、今の時代ゲーム機やeスポーツが流行る中、リモコンやモニターを見ながら重機を操ることに興味を持つ子供も多いはずだと思ったからだ。落石ゲームやラジコンで楽しそうな子供たちの笑顔と、ビックリした眼差しで災害の写真を見てくれた子ども達の顔が帰社しても忘れられなかった。「この体験を地元の子供たちにも経験させてあげたい！」。これが小学校への防災学習出前講座のスタートである。

9月に入り、子どもの連絡帳を通じて担任の先生と校長先生へ打診した。即是非お願いしますとの返事が返ってきた。当社の社屋がある大町市はSDGs未来都市に選定されており、地域と協働するコミュニティスクールを推進していた事も後押しした。我々もより楽しく分かりやすい授業の構想を練った。文科省の学習指導要領では、小4～小6の社会科と理科で、自然災害・国土と災害・流れる水の働きと土地の変化・地層と流水、火山噴火、地震との関係等を学んでいることを再認識した。これは当社の得意とする地質調査～測量設計～工事のノウハウをすべて教育に活かせると確信した。机上講習のほか、前述の落石ゲームと崩壊対策モデルと災害ビデオの他、ITを使ってハザードマップの見方と使い方、振り返りクイズも加えて授業を構築し実施した。詳細は書ききれないが、児童にも先生方にも大好評で、昨年度は2校へ出向き、5年生と6年生で計6回実施した。

各回実施後、子供達や先生方から勉強メモや感想文、御礼状を沢山いただいた。本当に涙もので、直筆を載せられず残念であるが、その一部を以下に記したい。「こんなに楽しい授業ありがとう」「教科書に載っていないことを教えてくれた」「木や森、自然は大切」「お役所や建設の人達が僕たちを守ってくれたこと初めて知って勉強になった」「今日勉強したことを姉妹や親に話して災害に備えたい」「これから何が自分にできるか考えたい」

この様に小学生から建設業の存在価値とあるべき姿を逆に学ばせて頂いた。地域防災力の向上や建設産業に興味を持ってもらえる人が増え、未来に繋がることを願い、今後も自覚と誇りを持ってインフラ整備や災害復旧に臨みたい。SDGs開発目標「質の高い教育をみんなに」「住み続けられるまちづくりを」「陸の豊かさも守ろう」を推進すべく、来月も2クラスの子供たちが出前授業を待っている。さぁまたレベルを上げて準備しないと。以上

優秀賞

2つの技術を未来へ

髙野（たかの） 綺羅々（きらら）［株式会社廣瀬］

この会社に入社して3年になった。私は中学生のときから建設業界に進むことを考えていた。大学生の途中で社会インフラに関わる仕事がしたいと思い、学ぶ分野を変更して土木学科に編入した。そしてインターンシップで行った今の会社の現場で土木工事を見学した。写真やインターネットで調べたことはあるものの、実際に自分の目で最新の技術を使った施工を見ることが初めてだったため、とても驚いたことを覚えている。座学で勉強していたこととは違う仕事内容に興味を持ち、入社したいと思った。

入社後、私は建設業界全体でICTと言われる情報通信技術を活用した建設DX化が進められていることを知った。その流れに追いつこうと現在は工事の施工管理を学びながらICT技術を勉強している。実際に担当した現場で丁張と呼ばれる施工する前に位置や高さなどの目印をつくる作業をICT建機に導入して省略したことがあった。事前にデータを作成して重機に取り込み、オペレーターさんに重機内のモニターを見ながら施工してもらう流れで丁張作業にかかる人員と労力が不要になったのである。実際にICT技術を活用することで私はICTについてより一層理解を深めることになった。

その後、私自身でICT建機に取り込む盛土データを作成することになった。平面図、縦断図、横断図を使用した3次元設計データの作成は私にとっては難しく、何度も上司に質問してなんとか正確なデータを作り上げることができた。ICT建機に取り込み後、間違っていたらどうしようと不安いっぱいで重機オペレーターさんに何回も大丈夫か確認してしまっていた。盛土中も自ら確認したが、結果的には問題なく、設計値の規格に入った盛土が完成した。安心と達成感を同時に味わうことができて嬉しかった。完成後、工事とは直接関係ない整地で重機オペレーターさんがほぼ均一に土砂を敷き均していた。その光景を見て、前にICT施工ではない現場で「だいたい10センチ盛ってください」と非常に大まかな指示すると重機オペレーターの方々は指示した高さと変わらない高さに盛ることを思い出した。普段は重機を操作しない立場の私でも分かるほど難しいことをやっていて、これぞ職人技だなと感じた。技術はもちろんのこと、経験の凄さが目に見える出来事であった。

ICT技術を活用した建設DXは、建設業界の人手不足への対応策でもある。経験を技術で支えることができるICT技術は更なる進化を遂げると言われている。現場にいる私もそうなると感じている。工事で使用する重機はICT建機だけになる時代がくるかもしれない。そう考えていると、それまでの移行期間が今であるようにも思えてくる。最新の技術が職人技に並んで、さらに職人技が完全に過去のものとなってしまうのではないかとネガティブな発想になってしまう。しかし、今こうしてICT建機が進化してより良いものになっているのは、重機に乗って操作しているオペレーターさんのおかげでもある。その建機を開発した企業も実際の現場の声をもとに改良を重ねてきている。ここをこうしたほうが使いやすいとオペレーターさんから開発企業の技術者へ伝えているのを見たことがある。そうしてより使いやすい重機になっていく。ただ職人技が不要なものとなってしまうと捉えていたが、職人技を集約させたものがICT建機だと改めて考えるようになった。利便性が高くなっても今までの技術が無駄になるわけではない。

今までの職人技と建設DXとして活用されているICT技術、その両方を知ることは建設業界の未来に繋がることでもあり、どちらかを否定することではない。そしてそのことを理解し、技術を活用して広めていくのは私のような若手技術者でも出来ることではないか。ICT技術を見て、建設業界に進んだ私のようにこれからを担う若手技術者が出てくることもあるはずだ。いつか見えなくなってしまうかもしれない技がICT技術として別の形になっても活用し、建設業のより良い未来へ繋げていきたい。

優秀賞

夢をつくる

室橋（むろはし） 李璃（りり）［株式会社笠原建設］

「あれ？電気ついてる。」

もう閉園したはずの深夜のディズニーランド。ホテルの窓から見えたのは、高い壁で囲われた奥の明かり。昼のにぎやかさからは想像もできないほど静かな園内からのぞく光に、不思議な感覚を抱いたことを今も覚えている。何をしているのだろう。じっと窓の外を見つめていた幼い私に母が言った。

「誰もいなくなった夜に工事をしているんだね。すごいね。夢だね。」

ふうん、工事をしているんだ。そんな風に思っていた幼い私も社会人になり、地元の建設会社で働いている。特に建設業に興味があったわけではない。地元に帰って地域のために働きたい、という思いで就職先を探していたときに出会ったのが今の会社だ。「地域の役に立ちたい、守りたい」という考えや、地域に密着した事業内容、地域を愛し地域に愛されている会社であることに魅力を感じた。事務職の私が実際に建設現場に立ち入ることはあまりない。しかし、建設業に携わる一員として地域のために熱意をもって働いている。

住宅や学校、病院、商業施設などの建物や、道路や橋、線路などの構造物。これまで、当たり前のようにそこにあり、日常の一部としか感じていなかったものが、「建設業で働いている」というだけなのに気になって仕方がない。車で出かけるときも建設現場を見ると、どこの会社がやっているのだろう、どんな工事をしているのだろう、とつい考えてしまう。これまでの私では考えられないほどの気持ちの変化だ。建物がそこにある、新幹線に乗っている、道路を走っている、それだけのことにものすごく感動してしまう。どうして今まで気にも留めなかったのだろう。興味がなければ考えることもないが、確かにそこにある。建設業は「当たり前の日常をつくる仕事」なのだ。

社会人二年目になり、採用関係の仕事に関わることになった。現場の仕事を全く知らない私が、学生を満足させられるだろうか。不安な気持ちとは裏腹に、建設現場を見ることができる、と胸が高鳴った。堰堤工事、道路の崩落を防ぐ工事、倉庫の新築工事、橋梁架替工事など、多くの工事現場を見せてもらった。自分の何倍もの大きさの現場で、重機が土砂を運んでいる。人が動いている。すごい。本当に単純だが、そう思った。普段見ることのできない光景に圧倒された。

その中でも私が一番印象に残っているのは、道路の崩落を防ぐ工事現場でのことだ。その現場は、海沿いを通る国道にあり、潮や風雨による劣化から崩落が危ぶまれていた。日常的にその道路を使っていたが、現場は見えない。危険を感じるような場所もない。本当にそんな現場があるのだろうか。そう思いながら、案内された場所へ向かった。道路の途中に見える工事看板を海に向かって進むと、驚くことにそこには何台もの重機があり、多くの人がえぐれた道路を修復する工事をしていた。もしもこの道路が崩落したら、人の命が犠牲になるかもしれない。車での往来が困難になる人がいるかもしれない。それを防ぐために工事をしているのだと、技術者の方が言っていた。地域に暮らす人たちの安全を守るため、生活を便利で豊かなものにするため。そんな思いで人知れず働いている人がいる。建設業は「当たり前の日常を守る仕事」なのだ。

こんなにかっこいい仕事をしている人たちと同じ職場で働いている。それだけで誇らしい気持ちになった。私の現場は会社の机。小さな現場から、大きな現場で働く技術者たちの手助けをする。正直、大変だと思うこともあるが、私の仕事もきっと誰かの当たり前を守ることに繋がっているのだ。建設業は、ただ建物を造ったり、道路を直したりするだけの仕事ではない。そこで暮らす人たちの笑顔を守り、未来を描く、そして、夢をつくる仕事なのだ。

幼い頃、ホテルの窓から見えたディズニーランドの光も、誰かの夢をつくるやさしい光だったのだ。

優秀賞

白く、馳せて燃ゆる

芹澤（せりざわ） 和也（かずや）［加和太建設株式会社］

令和5年初夏、建設業という世界に入り右も左も分からない私に、厳しさを持ってそれを教えてくれた下請業者の元社長が病気のため85歳で亡くなった。昔気質という言葉にそのまま服を着せたような人だった。もう10年以上前の事だが、私が初めて現場代理人として受け持った工事を最後に彼は建設業を引退した。理由は高齢であったかもしれないが、私の最初を彼は最後として選んだ。

忘れられない言葉がある。工事も終盤に差し掛かり私が出来高の話を切り出した時に彼はこう言った。

「そんなのどうだっていい！金の話はするな！」

その時の私にはその言葉の意味が理解できなかった。しかしその言葉こそが、私が今仕事をするうえで最も大切にしている3つの精神、“利他”“布施”“自己犠牲”に結びつく事になる。

昭和終期、私はごく平凡な家族のもとに生まれた。裕福でも貧乏でもないありきたりな家庭で育ったと思う。私がまだ幼い頃、休日の昼は家族でよく外食へ出掛けた。なんとなく今思い出す。父はラーメンを食べに行けばナルトをくれた。中華丼を食べればウズラの卵をくれた。それぞれに一つしか入っていない希少感か、その可愛らしいフォルムからか、私は嬉しい気持ちになったのを白くボワっとした記憶の中で覚えている。それと同時に、その父の優しさが不思議だった。好きなものをあげてしまうという気持ちがまだその頃の私には分からなかった。

それから20年近い月日が流れ、私は土木の世界に立った。今思えば当時の私は技術を身に付けるという事にとにかく固執した。長年土木に携わり職人と呼ばれる人たちに付いていくのに必死であり、日々の業務にも追われ、最高の技術を持つ事こそが技術者としてのゴールだと信じていた。

それから更に10年以上の時が経ち建設業というものがなんとなく分かってきた頃、ふと自分に問いただしてみた。

「これだけ与えられてきてもなお、自分の技術のために土木人として生きるのか？」

違う。建設業というものは使う人のためにあるべきだ。土木で言えば、道を通る人、橋を渡る人、河川の流域に暮らす人にどう寄り添うかであり、どんなに高い技術でどんなに良い構造物を造ったところで使う人が不便では意味がない。

建設業も父が築こうとした家族と同じだ。人を大切に想う所から始まり、人と人との繋がりがそれを進化させてきた。

加え昨今の建設業界では、人材不足対策や建設災害防止、生産性向上や働き方改革対応の観点から建設DXの導入が推し進められている。当社工事においてもICT施工は当たり前になり、様々なシステムの使用を試みている。

物事の始まりには労力が不可欠で、現場における対応は初期のシステムに対する理解に時間が割けず、つい遅れがちになる。言い換えれば最初は“面倒”という感情を抱く。

しかしながら、ある時のシステム開発会社との打合せの際、いかにもシステムエンジニアという風貌で色白の開発担当者がこんな事を言った。

「我々の開発は、現場で働く皆様の仕事が楽になって初めて意味を成すんです。」

彼らもまた、私たちのために仕事をしている事を知った。彼らの開発が私たちの残業時間と事故の危険を減らす。建設DXの入り口にしり込みする自分を恥じ、積極的に取り入れていく事を決意した発言だった。

思えば皆が自分より私を大切にしてくれた。

本来仕事はお金のためにするもののはずである。亡くなった下請業者の元社長は、お金のためではなく私のために仕事をしてくれた。生きていたってそんな事を口に出すような人ではないし今となっては確認もできない。ただ、棺桶の中で白い顔をして眠る優しい顔を見れば言われなくたってそんな事は分かる。

そういった自分よりも何かを大切にするという人たちの想いを背負って私は土木人として生きる。技術を求めた10年間も遠回りではない。その技術を自分以外に使い、顔も知らない人々の生活を造り、支え、『あたりまえ』を維持する事が今の私の土木人としての生きる意義だ。

そして忘れてはいけない事、その想いを次の世代へ伝え続けなければならない。人材不足対策や担い手確保にも繋がる大切な事である。

私が現場代理人として従事した国土交通省発注の河川工事では、小学生約80名を授業の一環で現場に招き、魚の放流体験により環境保全や川の防災を学ぶと共に、土木の“希望”を伝えた。

人工衛星から位置情報を取得した重機施工はまさに「宇宙と土木」、また「ロボットと土木」と題した遠隔操作の話等に目を輝かせる小学生の姿は私の脳裏に焼き付いて離れない。きっとその中からも将来、多くの土木人が現れる事だろう。

幼い頃は自分本位だった私も30歳代になり父になった。家族で行くラーメン屋で幼い娘の器に自分のナルトをそっと置く私がここにいる。

建設産業人材確保・育成推進協議会

令和5年度
高校生の作文コンクール

■趣　　旨

国土交通省と建設産業人材確保・育成推進協議会では、将来の進路として建設産業を考えている高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒を対象に、建設業への思いや建設業を進路に考えるようになったきっかけなどを広く伝えていただく場として、作文コンクールを実施し入選作品による作品集を多くの方々に届けています。

「高校生の作文コンクール」は平成25年度から実施し、今回で11回目となりました。

■募集概要

応募資格	高等学校の建築学科、土木学科等で学ぶ生徒
応募期間	令和5年5月8日(月)～ 6月30日(金)
応募テーマ	建設産業にまつわる内容で、以下のテーマで作品を募集しました。 ものづくりの魅力
応募総数	920作品

■作文コンクール入賞作品

入賞作品は、(一財)建設業振興基金のWEBサイト等に掲載。

[作文コンクールWEBサイト]

https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/result.html

■選考委員

古阪秀三	立命館大学 OIC総合研究機構 グローバルMOT研究センター 客員教授 建設産業人材確保・育成推進協議会 運営委員会委員長
宮沢正知	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課長
松野憲治	国土交通省不動産・建設経済局 建設市場整備課 建設キャリアアップシステム推進室長
上田国士	(一社)全国建設業協会 業務執行理事
樋脇　毅	(公社)全国鉄筋工事業協会 常任理事
奥地正敏	(一財)建設業振興基金 経営基盤整備支援センター 担当理事

2023 ESSAY CONTEST

国土交通大臣賞

見えないHERO

髙橋（たかはし） 龍之介（りゅうのすけ）
［山形県立山形工業高等学校 土木・化学科　土木技術コース ２年］

『みえない時間に、みえない場所で、みえない誰かを想い…』。この言葉はあるCMで使われていた曲の歌詞※の一部です。私が学ぶものづくりの世界、土木の世界はまさしく、この歌詞のとおりだと思います。それを、「誰にも気づかれない地味な仕事」と言われたり、「男社会のきつい仕事」と捉える人も中にはいるでしょう。でも、決してそんなことはないと思うのです。

私が工業高校、しかも土木の学科に入学しようと思ったきっかけは、水害を経験したことからでした。私の暮らす地域の多くの場所で、床上・床下浸水が発生し、小屋が流されたり、橋に流木がつっかえ、川の水があふれ出ました。五十年に一度、百年に一度の豪雨により、様々な被害が発生しました。私の家も沢からの水により浸水し、土砂によって池や畑が埋まりました。当時、小学一年だった私でもこの状況はただ事ではないと、不安や心配で怯えていたのを今でも鮮明に覚えています。明日どうなるのかもわからない中で、私にとって希望に見えたのが、地区中のあちらこちらで、毎日全力で復旧作業にあたる土木関係の方々の姿や、私の家の復旧に関わっていただいた建設業者さんや大勢のボランティアの皆さんの姿でした。夏休み中の出来事だったので、普段はなかなか見ることのない土木作業を間近で見ることができて、私自身初めて土木工事に対して興味を持つきっかけとなりました。それから後に家の裏に砂防ダムの建設が始まったり、土砂災害の出前授業を体験したり、身近でものづくり、特に土木の必要性と大切さを学ぶ機会をたくさん経験することができました。

水害での経験や、ものづくりに関わる経験は誰でも得られるものではありません。私だから持っている貴重なものです。そんなことを考えたときに、工業高校で土木を学ぶことが自分らしい進路選択だと決断しました。高校では、土木についての知識や技術を学んでいます。今までであれば行けなかったダムの内部を見学したり、測量機器に触ったり、高校に入学してからの短い間で、今まででは考えられないような新しい経験をしながら日々学んでいます。そんな高校での時間や、私自身が人生の中で経験したことなどを織り交ぜてこの作文を書こうと考えだしたとき、ある事に気づきました。

水害の時に復旧に関わっていた建設業者の方々も、今現在学んでいる工業技術も、見えない誰かが毎日を笑顔で過ごすためのものだということ。普段誰にも気づかれなくとも、私たちが日常を過ごすために全力を注いでいるのが、土木のものづくりだということです。ものづくりは、見えないもの。見えない誰かを思って、今日も朝から働く工事関係者の皆さんこそ、私は世の中の真のHEROであると思います。なぜなら、HEROはそう簡単に姿を見せてはくれないのだから。

※出典：応援ソング　作詞：三菱電機ビルソリューションズ（株）CM制作チーム
（旧 三菱電機ビルテクノサービス（株））、2016年

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

アンテナを広げて

佐久間（さくま） 優人（ゆうと）［福島県立福島工業高等学校 建築科 3年］

私が思うものづくりの魅力は2つある。1つ目は感動を生み出すこと、2つ目は世界に対するアンテナが広がることだ。

私は小さい頃からものづくりが好きで、漠然とではあるが、将来はものづくりの道に進みたいと考えていた。しかし中学校の3年生になると、進路について悩み始めた。高校は普通科に行くべきか、工業科に行くべきか、自分が将来何をしたいのかですら、分からなくなってしまった。そんな時、私はある建物に心を動かされた。それはテレビで特集が組まれていた法隆寺だった。1400年も前につくられた建物が、今なお現存し、それを一目見ようと全国から人が集まる。さらに、法隆寺を守るために様々な職人が携わっているという。それを見て、自分がつくったものが1000年以上も残り、後世の人々が守り続けてくれることが羨ましく、そんな建物をつくってみたいと思った。それがものづくりの道に進もうと思ったきっかけだった。テレビを見ただけでものづくりの魅力に惹かれていた。それが1つ目のものづくりの魅力だった。ものをつくって終わりではなく、そのものが存在する限り、もしかすると、無くなってからも、周りの人を楽しませたり、感動を与えたり、昔を思い出せることができると思う。法隆寺もそんな建物だった。今ある建物が、この先数百年も維持される建物なのかはわからない。しかし、私は何世代にも渡って後世に残る建物をつくってみたい。

私は現在、工業高校の建築科で建築に関するものづくりを学んでいる。最近になって、街並みや変わった建物、面白い建物の写真をよく撮り、建築の本も読むようになった。なぜかというと、自分の設計に写真で撮ったような面白い建物のディテールや、本から得たアイデアを取り入れてみたいと考えるからだ。建築を学んでから、身近な場所ですら、新しい景色が見えてくる。デザインを考えた人のアイデアに驚いたり、感心させられたり、時には理解できないこともある。しかし、建築を学んでいなければ、こんなに建物に心を動かされることはなかっただろう。これが2つ目の魅力である。建築を学んだことで、建築に対するアンテナが広がり、世界が広がった。建築を学んでから、知るということはとても楽しいということに気が付いた。現在では、建築コンペの作品作りに追われ、毎日忙しいがとても充実している。新たな発見や自分の想いをコンペで形にするのがとても楽しいからだ。

改めて、ものづくりの魅力とは感動を生み出すこと、世界に対するアンテナが広がるということだと考える。これから先、私は建築の道を進む。その道は優しいものではなく様々な困難にぶつかるであろう。もし、困難に挫けそうになった時は、ものづくりの魅力を思い出して踏ん張りたい。建築の道に進むきっかけになった魅力と、建築を学ぶ魅力を思い出して。新たな魅力を見つけるために。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

私達の日常を支える建設業

下方（しもかた） 陽平（ようへい）［愛知県立愛知総合工科高等学校 建設科 3年］

建設業、それは身近にあり、多くの人々の生活を支える重要なものです。例えば、通勤通学などにも使う道路や橋、鉄道、上下水道、港湾などは欠かせない生活インフラです。こうした生活インフラを整備するために行われる建設工事はとても重要なものです。

私がそのことを感じたのは高校２年生の時、国土交通省で行われた就業体験でした。その時に港湾で行われていた大規模な工事を見学させていただきました。その工事はふ頭にモータープールと呼ばれる巨大な駐車場を作り一度に運べる自動車の台数を増やすという目的の工事でした。私が見学した際はケーソンというコンクリートで作られた箱の据え付けが終わっていました。その他にも外国への輸出貨物の増加やコンテナ船の大型化に対応するために耐震強化岸壁を機能強化する工事、土砂による泊地の埋没を阻止するために行われる浚渫工事などを見学しました。そこで浚渫に使われる船に乗せていただき、浚渫を行う機械や操縦室についての説明を受けました。時々専門用語が出てきて頭が混乱しましたが、普通に生活していたら入ることのできない場所に、高校の頃から建設に関わっていたおかげで入ることができて感動しました。また、実際に現場の工事を指揮する方から現場の話や港湾土木についてのお話をいただき、とても貴重な体験ができました。

見学を終えて思いました。このような工事が行われることにより、港などが整備されて日々の暮らしに必要な物資などが届く。港の工事に限らず、日常生活の様々な場面で行われているインフラ工事が人々の暮らしを支えるのだと改めて思いました。

私は高校で土木を学んでいることもあって、将来は人々の暮らしを支える建設業に就きたいと考えています。就業体験に参加する前は学校で学んでいる知識がどういった場面で使われているのかあまり想像できませんでした。しかし、実際に行われている工事や現場監督の方が働いている姿を見たときに、今学んでいることは人々の生活を支える大切な工事などに使われているのだと実感しました。現場監督の方に質問する機会があった際、建設業のやりがいとはどんなものなのかを聞きました。大変なことはあるが、自分が関わった工事が人々の暮らしの役に立つことが建設業のやりがいなのではないかと言いました。そうした話を聞いて自分の中で建設業に携わりたいという気持ちがより一層強くなりました。

私が思う建設業の魅力とは日常生活を支え、日々の暮らしをより豊かにすることを可能にする職業であることです。ですが、建設業に携わる中で苦しい事や辛い事なども数えきれないぐらいあると思います。そういった事を乗り越えて成長し、人々の役に立つ建設業に携われる人間になりたいです。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

我が家は古民家

辻田（つじた） 陽彩（ひいろ）［長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年］

我が家は曾祖母の家だ。入母屋屋根、破風、広縁、高床、大梁、渡り廊下のある純和風の典型的な昭和の木造住宅である。屋根は私の遊び場だった。柱には子・孫・曾孫らのたくさんの背比べ跡が残り、家と人が育ってきた築六十五年間の歴史を物語るようにも感じる。私が建築分野を志した背景に、この昭和造りの家で育った事実の存在は大きい。

授業で家の造りを勉強する際、昭和造りのこの家は魅力の詰まった身近な教科書であり、構造や仕組みを直に学ぶことができた。木造住宅の構造は地震や風力に対して崩壊しないことを目標に造られており、適度に揺れながらも壊れないように設計されているので、「家が古いから風で揺れたり軋み音が酷い。」と感じていたことが木造軸組工法の技術なのだと知り、祖父が「壊れにくい家だ。」とよく言っていた意味が理解できた。私の家には年季の入った工具もたくさん置いてあった。昭和の中頃から曾祖父や祖父らが使っていた、役割を終えた工具達。刃物類など危ない物を除いて、よく触れていた。幼い私は誤った触り方をして家族に阻止される事も多分にあった。授業で正しい使い方を学び理解し、実際に工具を用いて自分の手で作り上げる喜びを感じた時は、本当に嬉しかった。

昔、隣に住んでいたおじさんが木製の折畳み踏み台を作ってくれた。また別のおじさんは、高床であるため、洗濯物を干す作業がしやすいようにと簡易テラスを作ってくれた。どちらも高齢の曾祖母が作業しやすいようにとの提供だが、まだ小さかった私にも手が届きやすくなり、一人で出来ることや手伝いができることが増えた。誰かが不便としている障壁を、生活しやすいように形を変えれば些細な負担やストレスが軽減でき、事故抑制にも繋がる。おじさん達の心遣いは、曾祖母や私の生活の質を上げて便利さを与えてくれた。私は誰かの救いになる物を考えて作り、形にして、生活の質を上げる手助けに結び付くことが「ものづくり」の最大の魅力と考える。建築の道を志すきっかけの一つに、そんな隣近所の心遣いも影響している。私の家もこの先、経年劣化や老朽化により不具合や住みにくさも確実に生じてくるだろうが、これまでの家族の歴史の詰まった大切な空間を、これから先も大事にしながら生活を紡いでいきたいと思う。

これから建築の道に進んでいく私達には、どんな人も心地よく過ごしやすい建物環境を考え、作り、整えていくことが使命である。使う人々の思いを形にした建物が何十年も長く残るということは、自分が手掛けた物がその人生に存在するということ。自分の手で誰かの思いを形にし、携わった建物が機能して誰かの役に立ち、家や街、地域を作り自分の仕事が形となってずっと残っていくことは建築分野に携わる者としての醍醐味だと思う。

2023 ESSAY CONTEST

不動産・建設経済局長賞

「建築の使命と協力してものをつくる達成感」

松本（まつもと） 瑞希（みずき）［長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 3年］

人には帰る家が必要である。それは安全のため、寒さ暑さを凌ぐため、疲れを癒すため。一日の終わりにそんな安心できる場所があると次の日もまた頑張ろうと思えるだろう。そんな家を造る建築業に私は憧れを抱いている。

私はずっと人の役に立つ仕事に就きたいと考えていた。それは別に建築である必要はなかったのかもしれない。それでも私が建築の道に進むと決めたのは責任感によるものだった。家を建てるという行為は常に責任が伴う。それはお金をもらっているからではない。建築主の未来をこちらが預かっているからだ。建築主はこちらのことを信頼してくれているから仕事を任せてくれる、ならばその期待を裏切るようなことは決してあってはならない。そんな理由から当時小学生だった私は責任をもって誰かを幸せにしたいという使命感に駆られていた。

ものづくりの魅力といえばやはり達成感だと思う。私はよくプラモデルを作るのだが、ものづくりとプラモデルの作製は多くの共通点がある。そもそも、ものづくりとは良い材料を準備するところから始まる。プラモデルに例えるとバリ取りのようなもので良い品質の素材が良い作品を作ると言えるだろう。組み立ても同じで手順を間違えると作品が完成しない。どちらも綿密な計画が必要だということだ。そんな風に試行錯誤しながら丁寧に作品作りをしていると、どんどん夢中になっていく。そしてその作品が完成した時のうれしさは単純な言葉で表せるものではない。そんな魅力を秘めているものづくりは自分で設計することでさらに大きな喜びを味わうことができる。ものを作るにあたって設計図は良い作品をつくるために必ず必要となる。誰かが作った設計図を使うのではなく自分の思い通りに、さらに自分の手で作品ができていく様を見ているのはとても気持ちが良いものだろう。このように最初から最後まで自分の手でものづくりをすることで得られるこの達成感こそがものづくりの魅力だろう。

実際の建設現場では設計から施工まですべてに携わることはほとんどない。だがそれはみんなが協力して各々の仕事を全力で全うすることで最高のパフォーマンスを出せるということだ。そう考えるとただ作ることだけがものづくりの魅力なのではないのかもしれない。私が感じているこの使命感は建築主に対してだけの早計なものだったのだろう。私がこの文章を書きながら考えた「ものづくりの魅力」に対する答えは『他人と協力してみんなで作品を完成させたときの一体感』だと結論を出した。ものづくりは一人でやることではなく、誰かと協力して果たしていくのが答えなのではないかと。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

ものづくりのあたたかさ

野澤（のざわ） 成仁（なるひと）［栃木県立小山北桜高等学校 建築システム科 ３年］

私が建設業に関するものづくりについて魅力を感じた出来事は2つあります。

1つ目は、私が小学生の時に新しい家を建て、何もない所から新しいものが生まれていく体験をしたことです。住み慣れた家から別の土地に引っ越すことや仲の良い友人との別れにとても不安を感じました。初めは、何もないところからどんな風に家ができるのか想像もつきませんでした。まず初めに、理想の家づくりについて何度も何度も打ち合わせをしました。その際一級建築士の方が、とても丁寧に色々なアドバイスをしてくれました。また、私たちの意見をしっかり取り入れた設計をしてくれました。その後、いよいよ工事が着工となり、約半年間をかけて完成しました。更地から土壌改良工事、基礎工事をし、本体工事と進んでいき徐々に家の形となっていく様子を見てとても感動しました。そして、完成した家は私たち家族に安らぎの場を提供してくれる大切な場所となりました。設計をしてくれた一級建築士と住宅メーカーの方々にとても感謝しています。

2つ目は、令和元年に台風１９号が襲ってきたことです。激しい雨により、家の近くの川が氾濫しました。道路や田畑が一面水浸しになり、避難勧告が出ました。また、地元の消防団の方に私たちの救助に来ていただきました。そして、私たちの命に別状はなかったのですがとても怖い経験をしました。翌日には氾濫した水は引きましたが、自宅近くにある河川の護岸は崩落し、道路は陥没してしまいました。その時、壊れた河川や道路を建設関係の人々が迅速に復旧工事に当たりました。その姿は、とても輝いて見えました。私たちの生活で当たり前にある安心安全は、建設業界のモノづくりの上に成り立っていると改めて実感しました。

この2つの出来事は、私の中のモノづくりへの思いに大きな影響を与えました。家づくりでは、家族の絆や思い出づくりなどに寄り添う暖かいものづくり、河川や道路の復旧工事では、命を守るモノづくりに触れました。そこで、私は建設に関するものづくりの一員として、建設工事現場で汗を流し働く自分を想像すると、とても魅力的だと感じるようになりました。私も将来、建設技術者として人々が安心で快適に暮らすことができ温かみを感じられるようなものづくりの仕事に就きたいと思うようになりました。

現在、私の住む栃木県でも、農業土木や建設工事現場の様々な職種で特に若手の人材不足が問題となっています。私は、将来人々の生活に欠かせないこととともに、温かみのあるモノづくりとしての建設に関わる仕事に就きたいと思います。そのために、私は、今できることに一生懸命取り組むことが重要だと思います。残り少ない高校生活の中で建設に関する資格の勉強や仲間づくりに励み、後悔の無いように生活していきたいです。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

「当たり前を支える ～影から社会をバックアップ～」

池田 稜（いけだ りょう）［千葉県立京葉工業高等学校 建設科（土木コース）３年］

私が思う「ものづくりの魅力」とは、当たり前を作ることだと思います。

当たり前とは、なくてはならないものです。例えば、蛇口をひねればきれいな水がでたり、電車に乗ったら目的地に着いたり。身の回りには私たちが思う以上に当たり前が隠れています。その当たり前を影から支えることこそが土木・建築分野の醍醐味なのです。

土木には昔から3K「きつい」「きたない」「危険」のイメージがあり、あまり人気のない職業です。しかし、土木・建築の分野で仕事をする人がいなくなったらインフラの整備がされず、社会が根本から崩れてしまいます。だから私は「当たり前を守る。」という縁の下の力持ちを担っている土木にとても憧れを持ちました。

昨年、土木建造物写真コンクールに応募するために埼玉県春日部市にある首都圏外郭放水路を訪れました。そこには、都市で水害が起きた時に大量の水を放水することができる、まさに「水害の番人」が待ち構えていました。地下に、「こんな大きな施設が」と、とても驚かされました。それと同時に土木工事の重要性について改めて実感しました。私たちが普段、安全に暮らせているのはそういう影からの支えがあってのことなのです。それはとてもありがたいことです。その感動を写した私の写真は特別賞を受賞することが出来ました。

先日、長野に行った際に高速道路を利用しました。多くの方が高速道路のメンテナンスやトンネルの工事をしている姿を目にしました。車窓からの一瞬ですが、目の前で見るトンネル工事の足場は圧巻で目に焼き付いて離れません。山を切り開き、掘削をしてコンクリートを流し込み、トンネルを開通させる。私たちが普段何気なく利用しているものには多くの人の「努力・知恵・技術」が詰まっています。

また、コロナの影響でオンラインや自宅などで仕事をする企業も多い中、建設業はどんな状況でも人対人で仕事をします。顔を合わせチームで協力し、一つのものを造り上げる。これも土木の魅力の一つだと思います。

今、私は学校で座学や実技で土木に関する多くの事を学んでいます。先人達は生活をより便利に暮らしをより豊かにするために道具を発明し技術・知恵を発展させ、ものづくりをしてきました。「～したい」という思いは「欲」＝「力」だと思います。そうして今まで日々発展してきました。

私は卒業後、土木分野の仕事に就きます。今まで先人達が培ってきた「知恵・技術」を若い世代の一人として絶やさず繋いで行きたいと思います。そして、多くの人に土木の魅力が伝わるのが私の願いでもあります。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

建築とは

渡辺（わたなべ） 一匠（かずなり）［山梨県立甲府工業高等学校 建築科 3年］

昔からものづくりが大好きな私は、甲府工業高校建築科の入学試験を控え、面接練習をしていた。そこで、面接官の先生から驚きの質問が飛んできた。「そもそも建築って何なの？」。予想もしていなかった質問に私は、「建物をつくることです。」としか答えることができなかった。

時は流れ、高校二年生の冬。自分で一から設計した建物の模型を作る授業があった。その作業をしているとき、一人の先生が私の横を通り過ぎると思ったら、そこで立ち止まった。するとこう言った。「この模型気に入った！この建物、実際に住んでみたいな！」と。私は嬉しくて嬉しくて仕方がなかった。もっと色々な人から認めてもらいたいと思った私は、試行錯誤しながら更に良いものを作り上げた。すると、周りの友人が集まってきて、「すごい模型だね！こんな建物で暮らせたなら、毎日が楽しくなりそう。」と言ってくれた。嬉しいという気持ちもあったが、何かやりがいを感じた。そう。人が笑顔になったからだ。ただ褒めてくれたのではなく、幸せそうな顔で話してくれた。このとき、私は二年前のあの言葉が頭の中で何度も再生されていた。そしてやっと今、その答えが分かった気がした。建築とは単に建物を築くことではなく、人の笑顔と幸せを築くことなのだと。橋を築いて人が笑顔になれば、それは建築なのである。家具を作って人が幸せになったら、それも建築なのである。

笑顔、幸せの源って何だろう。私は自問自答した。答えはすぐに出た。人との交流、つまり建物であると。人が生活するにあたり、建物を欠かすことはできないし、外に出たとしても視界から建物が消えることはない。縄文時代というはるか昔の時代にも建物が築かれていたことから分かるように、建物がなければ人は生きていけないのである。

私は人の命を預けられた匠たちの働きに感銘を受け、現在は住宅の大工を目指している。あれだけ小規模な模型であれほどの笑顔が見られたなら、建物一棟を築いたときは、どれほどの達成感があるのだろう。今私がこうやって作文を書いているのも、勉強しているのも、優雅にご飯を食べているのも、お風呂で温まっているのも建物があるからこそできていることであり、それは幸せな事なのである。

ものづくりが得意という点を生かすことができ、そして人の幸せをつくれる。なんて素敵な職業なのだろう。私の頭の中では立派な大工になって、建築している自分の姿が見てとれる。それをモチベーションにこれからの学業に励んでいきたい。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

受け継がれるもの

名田 纏（なだ まとい）［富山県立高岡工芸高等学校 建築科 2年］

私の考えるものづくりの一番の魅力は、技術や人の気持ち、思い出までも形にして残していけることだと思う。

私は小学三年生の時に引っ越しをして、今の家に住み始めた。前の家では祖父母、父母、妹と暮らしていたが、部屋数が足りなくなったことや、生活のリズムが合わなくなったことが原因となり、引っ越すことになった。新しい家は、前の家とは目と鼻の先にあり、何かあっても行き来できる場所だった。しばらくして、祖母が認知症のため施設へ入居し、祖父が他界したことで、空き家となった。私たち家族は、この家をこれからも残していくために、定期的に掃除を行い管理している。この家は、父が幼かった頃に祖父が建てた家で、父が育った場所であり、私や妹が生まれ育った場所だ。その中には、建てた頃からそのまま残っている塗壁や私が生まれた頃から使っている畳、食卓、風呂などとても長い間使っていた大切なものがたくさんある。その中でも、今の私の家にはない塗壁は、触るとざらざらしていて、少し粉が落ちてくるけど、安心感を得られたり、畳は祖母の兄弟が私の誕生祝に作ってくれたもので一緒に成長を感じられたりと、最近の家では見かけることが少なくなった建材や家の作り方の変化が形で残っている。そして、父が幼い頃に喧嘩で壊して三代目になった照明や亡くなった祖父が柱に書いてくれた私の身長の記録など、家に刻まれた思い出がたくさん残っている。

私は将来、建築の知識を身に付けて、自分でリフォームの設計をし、この家に戻って住みたいと考えている。昔から残っている部分、素材や思い出はできるだけ壊さず、手を加える部分を最小限にとどめて残していきたい。

近年、物や資源を大事にしようという考え方が広く浸透しつつある。以前は、使い捨てやスクラップアンドビルドという考え方が主流だったが、最近では、使わなくなった物や古くなった物は修理やリメイクをして、長く使っていこうという考え方が主流になっていると思う。この考え方は、私の家にも当てはまると思う。家を大事に受け継ぎ、長く使っていくことで、柱に残った身長の跡や壁に穴をあけてしまったことなどの思い出を残しながら新たな思い出を作り増やしていき、家自体が家族のアルバムのようなものになると思う。だからこそ家はできる限り長く使われてほしいと願う。

ものづくりは、それを見た人の気持ちを動かしたり、使った人たちの想いを残したり、職人さんの技術や当時の文化を形にして現代まで残したりする力がある。そしてそれは、ものづくりの役目であり、魅力でもあると私は考えている。将来、私はものづくりを通して、祖父の家を家族との思い出ごと受け継ぎたい。そのために、高校でしっかりと学び、建築の知識を身に付けて準備したいと思う。

2023 ESSAY CONTEST

優秀賞

土木の魅力

野崎 圭吾（のざき けいご）［金沢市立工業高等学校 土木科 3年］

私は十年後、土木の分野で活躍したいと考えている。二十三歳の私は、土木技術者として働いているだろう。中学生の頃は、就職なんてまだ先の話だと思っていた。高校生になって二年が過ぎ、三か月後にはもう進学や就職を決定する時期になる。私は土木の知識をより深めるために大学への進学を考えている。そのために、土木の勉強はもちろん、その他の教科の勉強にも力を注いでいる。

私が土木技術者を目指すようになったのは父の存在があったからだ。父は趣味で家の前に小屋を建てた。当時、小屋が水平に建つように土台を測量していた。その時、父は測量を私に見せてくれた。中学生の私にも分かるように三脚の立て方のコツや、据え付けの仕方など、測量について丁寧に教えてくれた。初めて見る測量は、分からない部分もあったが夢が詰まっているキラキラしたものに感じた。なぜ、中学生の私に丁寧に説明してくれたのかは分からないが、私はその日から小屋が完成するのがとても楽しみになった。そして、小屋が完成すると、小屋は自慢のものとなった。私はその時の父の笑顔が今でも忘れられない。今まで以上に立派に見え、その時から私は土木技術者という仕事に憧れ、高校は土木科に入学した。土木を勉強した今なら、父が説明してくれたことが分かる。三脚を首の高さまでしっかり上げ、基本がしっかりしていて良い測量だった。

私は、高校生になってから土木についてたくさんのことを学んだ。登下校中に工事中の現場を見ると、「今は何の作業をしているのか」「どこの測量をしているのか」などがよく分かるようになった。また、家で土木の勉強をするのが楽しくなった。友人と学んだ測量の種類や据え付け手順、レベルの部材の名前を言い当て、もっと土木について学びたいと思うようになった。

私は今、憧れの土木技術者になるために日々勉強と向き合っている。昨年、国土交通省北陸地方整備局金沢港湾・空港整備事務所の協力のもと、港湾工事にかかわる方々との意見交換会に参加した。「土木に関わる仕事」の講義から始まり、港湾工事に関わる職人の仕事内容など様々な話を受けた。話からは、職人さん達の仕事に対する熱意と志が伝わってきた。皆さんが誇りを持って仕事に向き合っていることが分かった。土木は一人では絶対にできない。私は、まだまだ修行中の身であり、まだ土木技術者の卵とも言えない状態だ。将来、私が目指す土木技術者になるために、今は揺るぎない丈夫な基礎づくりに邁進していきたい。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

笑顔の絶えない街作り

石田（いしだ） 麗奈（れな）［滋賀県立彦根工業高等学校 建設科 1年］

「普通科に行くんじゃなくて、専門的なことをやれる学校に行きたい。」その思いで私は今の学校に入学した。実際に入学してみると、色んな夢を持っている人がたくさんいて、自分の気持ちに不安を感じた。

ある日友達との会話の中で、ユニバーサルデザインやバリアフリーについての話が出た。私とその友達は、11階建てのマンションに住んでいる。そのマンションには若い人もいるが、高齢の方や障がいを持っている方もたくさんいる。私たちが住んでいるマンションが建った頃は、まだユニバーサルデザインやバリアフリーが行き渡っていなくて、唯一車椅子対応の入り口だけがあった。それ以外にはユニバーサルデザインなどの工夫はされておらず、エレベーターの溝が深くて車椅子だけではなく台車などの車輪が小さいものなどが挟まってしまったりするなどの悪い点があった。また、エレベーターのボタンが高く、小さい子や背の低い方、車椅子の方には届きにくく、そのボタンにも通路にも点字がなく、その通路も狭くて目の不自由な方や車椅子を使っている方にとっては快適に暮らしにくい造りになっていた。そこで私は「ご高齢の方や障がいを持っている方が、過ごしやすい生活を送るのを支えられるような仕事に就きたい。」と思った。

私は小さいころから人を助けたり、人の笑顔を見るのが好きだった。誰かを助けたりした後に、掛けてくれた一言、「ありがとう」がとても大好きで、言われるとすごくうれしかった。「ありがとう」、そのたった五文字は私にとって魔法の言葉だった。だから私は、この高校に入って建築についてたくさん学んで、ユニバーサルデザインやバリアフリーなどを取り入れて人のためになるようなものを作りたい。他の仕事のように利用者さんから直接「ありがとう」と言われるわけではないけれど、私が作ったものでより多くの人の生活を支えられたら嬉しい。また、私の妹は「てんかん」という病気を持っている。てんかんとは急に意識を失ったり、けいれんしてしまう「てんかん発作」が起こる病気だ。今は昔に比べ、バリアフリーやユニバーサルデザインなどが国内だけでなく世界にも広まっていて、街のいたるところで過ごしやすい工夫がこらされている。しかし、いまだに街に段差があったり、狭い道路などがある。だから私は、妹を含めたすべての人の暮らしを支えられる街を作りたい。少し工夫を加えたりするだけで、誰かの暮らしを支えられる。それがものづくりの魅力だ。

2023
ESSAY CONTEST

優秀賞

理想を追って

中島（なかじま） 莉菜（りな）［滋賀県立彦根工業高等学校 建設科 1年］

街は変わり続けます。街をつくる建物も路もです。ずっと昔から残り続ける建物も、今新しくできた住宅も、だんだんと形を変えていきます。その一番近くにいるのが「ものづくり」だと思います。

初めて私がものづくりをしたときの記憶はもうありませんが、その楽しさを覚えていて、ものづくりに励んでいます。高校に入学し、木工部に所属した私は、まず工具の説明、次に木材の加工の練習など基本を教えて頂きました。そして初めて一から椅子を一人で作りました。もちろん協力して製材したり、確認していただいたりもしましたが、完成した時の喜びはきっとこの紙にはおさまりきれません。間違えた穴を埋めた跡、何回もずれて模様のようになった釘の跡、決してきれいな仕上がりではないですが、この椅子は職人への一歩を踏み出した証です。完成した姿を想像して、ワクワクしながら作っていたので、作っているときの、遠くに光るまぶしいものをつかもうと追いかける気持ちになれるのが、ものづくりの魅力の一つだと思います。

私の夢は、理想の家を建ててそこに住むことです。理想というのはまだ探している途中なのですが、安全で快適で、そして私の好きを集めた、毎日を彩れるものにすると決めています。普段感じてもいない不便を取り除いたり、今までにない新しい技術を取り入れたりするのです。そのために学び、まだないものを生み出し形にしていきたいと思っています。

私の夢が叶うとき、私は一人ではないでしょう。たくさんの人とつながり合い、いろいろな人と共有し、もっと豊かな街になるのではないかと心躍ります。ものづくりには人の思いが集まらなければ始まらないと思っています。ああすれば、こうすればと試行錯誤し発展していく、建物だけではなく路も機械も人と同じように進化し続けるのだと思います。ものづくりに正解はなく、ゴールもなく、環境によって姿を変えたり、追求して、技術を向上させたりしていくことができるのがものづくりのまた一つの魅力だと思います。初めてが詰まったあの椅子から得た知識や技術を高め、夢を追いたいと思います。まだまだ抽象的で分かりにくい、追うにしては範囲が広すぎるものですが、私自身が心を躍らせるようなものづくりをしたいという思いを忘れないようにしたいです。ものづくりの魅力をいろいろな人と感じ、楽しみ、そしてその和をつなげていきたいです。建設産業を発展させ、ずっと今にぴったりという、変化していく時代に合わせて、求めるものが手に入ったようなものを作りたいです。

2023 ESSAY CONTEST

優秀賞

「私の憧れ」

小川（おがわ） 友菜（ゆな）［長崎県立佐世保工業高等学校 建築科 3年］

「シャー」と鉛筆で線を引く音。「ドンドン」と釘を打つ音。「ギコギコ」とのこぎりを引く音。音だけ聞くと建築業の仕事は騒がしいというイメージを持つかもしれないが、私には心地よく感じられるものだ。

私が建築業の魅力にとりつかれたのは、小学生の頃だった。建築業は、人の人生、生活に必要不可欠である住居や家屋を造り上げる仕事。そして街の未来を描くことができ、自分たちが作り上げてきたものが何十年もの間、地図に、人の記憶に残る。建築主からの依頼から計画・設計・施工といった流れで家が建つ。建築業といっても様々な職種があり施工管理・設計・技術・営業・事務・安全といったように大まかに分けて6つある。建築業と聞くと大工や力仕事というイメージが強いだろうが、全部が全部力仕事ばかりでは決してない。他の産業に比べると女性が少ないのは確かだが、増加傾向にあり建築を専攻する学生も増えている。私も工業高校で建築を学ぶ学生の一人だ。私は将来建築士になりたいと考えている。きっかけは父の知り合いの建築士さんに住宅の設計図を見せてもらった時だ。私が建築に興味があるというとそのことを父が知り合いの建築士さんに話したらしく、設計図をもらってきたのだ。設計図を見て私は衝撃を受けた。「すごい」という気持ちと同時に、「綺麗」だと思った。私はデザインや物を作ることが昔から好きだったので、この仕事にすぐ興味を持ち、憧れを抱くようになった。建築士は簡単になれるものでもない。よいアイデアが浮かばず苦しむときもあるだろう。だが建築主の喜ぶ顔を見ることだけで確かな手ごたえを得ることができる。その人が安心して過ごすことができる、幸せな空間を造ることができる。こんなにやりがいのある仕事は他にない。しかし、建設業・建築業というのは昔からのイメージがどうしても抜けず、あまりいいイメージを持たれていない。3K労働といわれている。だがそれは、建設業界の人手不足も原因の一つだ。近年は最新技術の導入により労働環境の改善も行われており、働きやすい環境が作られてはいる。従来の3Kと言われた建設業から新しい魅力的な建設業に変化している。

私は学校で建築を勉強していくうちにさらに建築業の魅力にとりつかれてしまった。私が目指す道は決して簡単な道のりではない。だが、私が憧れたこの道を進み続けると決めた。「この道を選んでよかった。」といえるよう私は、悔いが残ることのないよう進んでいく。

2023 ESSAY CONTEST

優秀賞

暮らしをよりよくするために

松田（まつだ） 麻央（まお）［長崎県立大村工業高等学校 建設工業科 3年］

日本は、四つのプレートの上に位置していることから、世界一災害の多い国だと言われています。実際、東日本大震災や熊本地震など、多くの死者を出した大きな地震をテレビで見たことがあります。災害には、建物や橋の倒壊や土砂崩れがつきものです。激しい揺れや地震による津波で、液状化現象が起こったり、街全体が海に飲み込まれたりするためです。

そんな災害が多い日本を支えているのは、優れた土木技術だと思います。防ぎようのないものから、人々の生活を守っているのです。私はずっと、人の役に立てる仕事がしたいと思っていました。土木に関連する仕事は、それにぴったりだと私は思います。災害復旧の他にも、誰もがよく利用する橋やダム、道路の建設工事を担います。橋が建設されると、人やモノの往来がしやすくなります。ダムが建設されると、水道水の確保や発電など沢山のメリットがあります。道路工事は、舗装や修復を行うと交通事故の防止に繋がります。拡張工事をすると、渋滞の軽減が期待できるようになります。このように、人々の日々の生活をよりよくすることができます。

また、土木技術は年々大きな進化を遂げており、ＡＩやＩＣＴといったテクノロジーを取り入れ、より作業が簡単かつスピーディーに進めることができます。私が、インターンシップで企業を訪問した際には、土砂崩れが起こっている現場の撮影がドローンで行われており、危険性も低く、簡単に作業を行うことができました。現代の測量では、全地球衛星測位システムを利用した、ＧＮＳＳ測量となってきています。人工衛星からの電波を利用して、あっという間に測り終わってしまい、自分が現場の仕事に抱いていた、「汚い」や「きつい」というイメージが覆りました。私たちのような女性でも簡単にできる仕事が多くあり、驚きました。

近年では、土木関係の仕事に就く女性も増えています。私も、将来なりたい自分になれるように毎日一時間以上かけて通学し、日々勉強に励んでいます。学んでいて思うことは、建設業というのは、規模が大きく、人々の暮らしを直接支えることのできる仕事であるということです。自分の頑張りが地域の人の笑顔に繋がったり、形として残ったり、地図に載ることは大きなやりがいになると私は思います。土木技術を学び、私は自分の育った街に恩返しをしたいと思っています。海も山も、地震が起これば人々の生活に牙をむきます。そのような災害から命を守っていきたいと思います。

2023 ESSAY CONTEST

優秀賞

命を守る仕事

山口（やまぐち） 留奈（るな）［長崎県立長崎工業高等学校 建築科 3年］

私が最初にものづくりに興味を持ったのは小学生のころです。授業で簡単な家具を作りました。自分で考えて作ったものが、椅子や収納用品として生活を支える役割を果たすことにとても魅力を感じました。

現在、私は高校で建築のことについて学んでいます。多くのことを学んでいくにつれ、以前よりさまざまな視点で建物を見るようになりました。その過程でさらに建築に魅力を感じるようになりました。

たとえば、建物が景色の一つとして街を作っているということです。三大夜景のひとつである長崎の稲佐山の夜景は、ひとつひとつの建物で人々が生活し、明かりを灯すことで、息をのむような美しい景色になります。そのほかにも、建物はそれぞれの地域らしい景色をつくることもあります。長崎であれば教会などの異国情緒のある建物や、京都であれば日本ならではのお寺や街並みなど、各々の特徴が表れています。それは日本に限らず海外でも、国によって違った建物がそれぞれの国の色をつくりだしています。色、形、素材、大きさなど様々な視点からものを見て考えることで世界と繋がれるというのは素晴らしいことだと思います。

また、建築は人々の暮らしの基盤となるものです。建物は気温や天候などの環境による被害への対策や、防犯を通して人々の生活を守っています。

建築だけでなく、ものづくりは多くの人々の暮らしを安全に、豊かにしています。それは言い方を変えると、建物に不備があれば人の命を奪ってしまう可能性もあるということです。一歩間違えば命を落とす危険があるのはその建物に住む人に限らず、作る側の人も同じです。建物を作るには、高所作業や重機械の操作、大きな材料や刃物などの道具など、身の周りに無数の危険があります。お客様が住む家の安全を徹底しながら、自分や周りの仲間の安全にも配慮するというものづくりの仕事は、大きな責任感と集中力を伴う大変な仕事だと思います。だからこそ、それを請け負って仕事をすることにとても魅力を感じ、尊敬の念を抱きます。

私は将来、建築の仕事に就いて、人々がほっとする空間、癒しを得られる空間をつくり、その建物に立ち入ることで救われる人を一人でも多くつくりたいです。そのために、高校生の現在、他の人より多く専門的な分野について学び、就職先についても沢山の情報をいただいていることを強みとして活かせるようにしたいと思います。また、実習や専門教科はもちろん、普通教科も手を抜かず、ずっとあこがれている建設業という仕事に就いて長崎の町をより良くすることに力を尽くしたいと考えます。

2023 ESSAY CONTEST

優秀賞

ものづくりとは

鈴木（すずき） 聡真（そうま）［熊本県立玉名工業高等学校 土木科 3年］

私がものづくりに携わりたいと思ったきっかけは、小学生の時の図工の授業でした。夏休みには貯金箱の制作に力を注ぎ、友達と一緒になって1つのものをつくった自由研究は今でも忘れられないくらい楽しかった思い出です。ものづくりとは、幅広いものであると私は思っています。私の今通っている学校は、機械、電気、電子、工業化学、土木という5つの科でそれぞれ異なるものづくりを学べる学校です。私はその中の土木科に所属しています。先ほどの小学生の思い出とは少し方向性が違っています。中学２年生までは機械科に入学して自動車整備士になりたいと思っていました。しかし、中学３年生の夏休み、あるテレビ番組をみて「自分の求めていたものづくりはこれだ」と心の底から思ったのです。それは建設業界の裏側についての番組だったのです。その中で自分の思っていたものづくりのイメージを一気に覆す言葉に出会いました。それは「ここにしかない世界で1つだけのもの」という言葉でした。この言葉に感動し、私も建設業に携わり、地図に残る世界で1つだけのものを作ってみたいと思い土木科を選択しました。

建設業は、病院や学校をはじめとして、皆さんが住んでいる町全体を作っている仕事です。建設業の中で土木とは、ダムや橋梁、道路などを整備し私たちの生活を守るエキスパートと言っても過言ではありません。土木の仕事がなければ私たちの家に水は来ませんし、毎日登下校で通っている道がきれいに施工されているのも土木があってこそです。このように土木の仕事で町は守られています。しかしそれだけではありません。地震や土砂崩れが起こった時などはすぐに現場に駆け付け、道路の復旧をし、道を作り緊急車両を通れるようにしています。自然災害の多い日本では一人でも多くの人を救おうと全力を尽くしているのは救急隊の方たちだけでなく建設業に携わっている方々も1つのチームとして全力を尽くしているのです。

私はこの仕事に一生涯携わることで人々の暮らしを支えていきたいと思っています。１００年２００年使うことのできる道路やダム、橋梁などを作り日本の未来を作ることのできる技術者になり、「ここにしかない世界で1つだけのもの」を作っていきたいと思います。

建設業のものづくりとは、世界に1つだけのものであり、地図などに残り、ほかの誰にも真似のできないどんどん進化していくものだと思います。それができるのが建設業の世界です。

MEMO

建設業しんこうWeb
建設産業の今を伝え未来を考える

https://www.shinko-web.jp/

建設産業人材確保・育成推進協議会　事務局／ 一般財団法人 建設業振興基金

〒105-0001 東京都港区虎ノ門4-2-12 虎ノ門4丁目MTビル2号館6階　TEL 03-5473-4572　FAX 03-5473-4594
E-mail jinzai@kensetsu-kikin.or.jp　URL https://www.kensetsu-kikin.or.jp/humanresources/sakubun/

※本冊子掲載記事の無断転載を禁じます。

建設業しんこう別冊
令和5年度 作文コンクール 入賞作品集
編集・発行 一般財団法人 建設業振興基金